

社会科学習指導案

指導者 大西 弘員

1. 日 時 令和3年5月25日(火) 第6校時(14:25～15:15)
2. 年 組 中学校第3年2組 計40名(男子20名, 女子20名)
3. 場 所 中学校3年2組教室
4. 題 材 日清戦争後から日露戦争前までの日本の国際的な地位
5. 本時の目標 日清戦争後から日露戦争前までの日本の国際的な地位の変化を, 歴史的な出来事などを判断基準にして, 捉えることができる。

学習の展開

学習活動と内容	指導上の留意点 (◆評価)
1. 導入 (10分) <input type="checkbox"/> 日清戦争後の日本の国際的な地位について, 説明でき, 基準を作ることができる。	○ 日清戦争を知識として捉えるだけでなく, 歴史的 事象の大きさを捉えさせるようにする。 (例) 日本が昔は朝貢していた清に勝った 明治の徴兵令がうまく機能している
【めあて】 日清戦争～日露戦争までの間の, 日本の国際的な地位の変化がわかる。	
2. 展開 (35分) <input type="checkbox"/> 三国干渉についての概念を習得できる。 <input type="checkbox"/> 三国干渉後の日本の国際的な地位について, 説明できる。 <input type="checkbox"/> 学級内で意見を交流し, 自分の意見と比較する。 <input type="checkbox"/> 日英同盟についての概念を習得できる。 <input type="checkbox"/> 日英同盟後の日本の国際的な地位について, 説明できる。 <input type="checkbox"/> 日英同盟のイギリスの本音をつかむことができる。 <input type="checkbox"/> 日英同盟をイギリスが結んだ本音を理解したうえで日本の国際的な地位について, 説明できる。 <input type="checkbox"/> 日清戦争後～日露戦争前までの日本の国際的	○ 三国干渉を自分なりに例示して知識が定着できるように, ペアワークを取り入れる。 ◆ 日清戦争後と比較して, 地位を表現している。 【主体的に学習に取り組む態度】 ○ 無作為に生徒を指名し, 1回目との変化を交流する。 ◆ 明治政府が近代化を急ぎすぎていると共に, 欧米型の外交をアジアにもたらしたことを批判されたことが理解できている。【思考・判断・表現】 ○ 意見を全体で共有し, 考えたことや理解したことを確認できるようにする。 ◆ 日英同盟をイギリスが結んだ事実をつかむだけでなく, その背後にある本音も理解することができている。【知識・技能】 ◆ 習得した概念を活用して, 日本の国際的地位に変化が見られるようになっている。【思考・判断・表現】 ◆ 日本が国際社会の中で地位を上げた部分と, 欧

<p>な地位の変化をまとめることができる。</p> <p><input type="checkbox"/>まとめ (5分)</p> <p><input type="checkbox"/>次時の学習内容を確認する。</p>	<p>米諸国に利用された部分を理解することができる。【思考・判断・表現】</p>
--	--

6. 授業の分析

生徒は中学校の歴史的分野で初めて「歴史」を「通史」として学習する。そのため、近代史から時系列で「世界史に含まれる日本史」を捉えることに難しさを感じる生徒が増えたり、様々な歴史的事象の内容が混同されたりと、学習の難易度が急に難しくなる。また「戦争」については、おおまかに「日清戦争」、「日露戦争」、「第一次世界大戦」、「第二次世界大戦」と4回学習することから、「原因→戦時中のようす→戦後の条約」と同じパターンの学習によって、マンネリと混乱が起きやすくなる傾向が、定期テストや実力テストを通じて見られた。このような課題を解決するために、今回の授業作りをおこなった。

具体的には「日清戦争～日露戦争までの間の日本の国際的な地位の変化がわかる」を「単元を貫く課題設定」とし、歴史的分野から公民的分野へのスムーズな移行ができるよう考えた。こうした学習を通じて、「戦争が起きる時のパターンをつかむ→平和主義や日本国憲法第9条の意味（歴史的分野・公民的分野）→次世代の予測→平和で民主的な国家の形成者になる」ことを目指し、豊かで深い学びや公民的資質の育成を狙った。

授業において工夫した点は4つある。1つめは、国際的地位を考えるための基準を「岩倉使節団」としたところである。国際的地位が上がるにしても下がるにしても、最初に共通の基準を設けなければ、全体での学びにもつながらないと考えたからである。生徒は★の数を最大5個で表現するにあたって、0個もしくは3個に設定した生徒がほとんどであった。★の数を3個に設定した生徒は、中間地点を選んだようである。2つめに、「どの立場で判断したか明確化させたこと」である。一昨年の研究会で、「江戸幕府の三大改革と田沼の政治」について2位と3位のランキングを決める学習の実践をさせてもらった際に、共同研究者である広島大学 川口広美先生より、「どの立場で判断したか、なぜその立場を選んだかを明確しにすることで、より深い学びになる」という指導・助言を頂いたからである。すると、日英同盟を結んだ時の日本の国際的な地位は、欧米諸国の立場の生徒は★が1個、明治政府の立場の生徒は★が5個と極端な結果が出た。生徒から多様な意見を聞くことができるとともに、生徒自身が他者の思考について向き合う良い機会になったと捉えている。3つめに、教師の教材研究の方法や、その際に抱く疑問を、追体験できるような問いの設定をおこなったことである。例えば、「なぜ露・独・仏は遼東半島にこだわったのか？」や「なぜ日本は強国のロシアと戦う気になったのか？」、「なぜ大国のイギリスが小国の日本と同盟を結んだのか？」や「ポーツマス条約に賠償金の内容が含まれないが、日本寄りな内容になっているのはなぜ？」という問いの設定である。生徒にアンケートを取ったところ、歴史的分野を苦手とする生徒から「学び方がわかった」という意見があったことは、大変喜ばしく感じた。4つめに、3つめの問いを解決するために、風刺画を多用したところである。風刺画は当時の世界情勢を面白おかしくも、的確に「国際的な力関係」を表現しており、ペアワークが円滑に進めやすくなった。

授業後の課題としては、時間が足りず、意見交換が後半になるにつれて希薄になった点である。本来であれば、「仲間の意見を聞いて考え方が変わった生徒の意見」も交流させたかったが、「知識の習得→分析→表現」という流れが授業の基本にあるため、表現がおろそかになった点は大いに反省している。

結びに広島大学 川口広美先生より、「当事者」＝「差別や抑圧に対し何らかのニーズを持つ際に、社会の支配的集団に対して抑圧を受ける少数者のこと」という定義を紹介していただいた。「当事者」＝「自分ごと」としてものごとを見る視点を持つことは、普段と異なる幅広い見方・考え方を手に入れることになり、将来の「平和で民主的な国家・社会の形成者」として、グローバル時代を切り拓く資質を磨くために重要である。」と指導・助言を頂いた。今後の実践でも意識していきたい。